

‘衣’に関わる体験学習プログラムについての現状と課題

—縄文時代の布づくりと古代の染色の体験学習を通して—

主任学芸員 大波紀子

はじめに

当館は開館9年目を迎え、様々な体験学習プログラムを企画してきた。当館の体験学習は、埋蔵文化財をはじめとする文化財を通して、可能な限り使用当時の材料、道具を用意し、本物の技術を体験できるプログラムとして提供することを努めている。その一連のプロセスが公民館等の社会教育施設や他の類似施設での体験内容との大きな違いであり、文化財を通しての体験学習プログラムの提供において、当館が先導的な立場を維持するうえで今後とも求められるところとなろう。

そこで、当館の体験学習事業において、担当者の一人として多く携わる機会を得ることのできた‘衣’に関連する分野について、実際に担当してきた平成16年度以降のプログラムを中心に、その成果と反省および今後の展望について私見をまとめてみたい。

1 当館の体験学習事業の取り組みと ‘衣’に関わる体験学習プログラムの位置づけ

当館の体験学習事業は、年間を通して体験できる常時体験型メニューと期日や人数制限を設けての募集型メニューとがあり、他に関連事業としては研修事業の中に含まれる学校や公民館等の指導者向けの体験学習支援研修が挙げられる。

そのうち‘衣’に関連する体験学習の取り組みは、個人来館者向けの体験活動室メニューや団体来館者向けの団体予約メニューといった常時体験型メニューから、実技講座やイベント等の募集型メニューや指導者向けの研修事業へと、一般的な内容のものから専門性の高いものへと段階的に広がりを見せている。‘衣’の分野は、衣食住のひとつとして人間の営みに不可欠のものであり、一般的に知的好奇心を駆り立てられる事象であるにも関わらず、埋蔵文化財としては関連資料に乏しく、当時の生活の様子を具現化することが極めて困難な分野のひとつでもある。そのため、当館の体験学習事業において“ほんもの”を見て、触れて、考えるというコンセプトを尊重すればするほど、‘衣’に関連しての体験学習プログラムの進展が困難となっている。

開館当初から、体験活動室メニューには「アンギン」「原始機」「時代衣装」といった内容のものを用意しているが、これらの体験は歴史系博物館等の体験メニューとしてすで

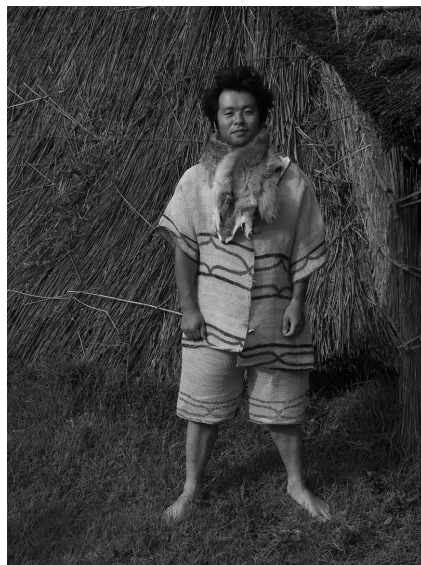


写真1 復元した縄文時代の衣装

に定番化されてきたものである。それら定番メニューのひとつひとつを深めながら、当館のオリジナル性を持たせているのが現状である。その1例を挙げれば、各時代を象徴するような時代衣装の着体験は当館に限られたものではないが、古代以前の衣装は当館が独自に復元したものである。特に直接的な資料の存在しない縄文時代と弥生時代の衣装は、他の施設では〇〇時代風といったものを目にすることもあるが、当館では時代背景や間接的な県内出土資料を参考にしており、当館の特性をよりよく反映させたものとなっている。

| 時代 | 原料名 | 布の種類 | 参考資料 |
|------|------|-------|------------------|
| 縄文時代 | カラムシ | アングイン | 土偶 (三島町小和瀬遺跡) |
| 弥生時代 | タイマ | 平織 | 弥生土器 |

表1 当館で復元した縄文時代と弥生時代の衣装の対比

そのような当館の取り組みの中でも、「アングイン」に関する体験プログラムは、他の類似施設との差異化を図りながら段階的に展開できた成功例のひとつといえる。周知の通り、「アングイン」とは越後地方に伝わる民俗事例であり、その事例を考古資料に照らし、今日まで一部地域で継承されてきた、織機が普及する以前から存在する縄文時代の布として通説化されるものである。縄文時代のアングイン体験は、どちらかといえば他の施設では子供向けのものへと略式化された形で導入されることが多いようであるが、当館では考古資料および民俗事例に裏打ちされ、より専門性を高めた内容へと進展をみせている。

もちろん当館でも、体験学習に参加する方々の主流は小学生を中心とした若年層であるが、アングインに関連したいくつかの体験については、体験内容の専門性を高めたことにより年齢幅を広げることとなったのである。そして、その構成員の大半が、各種カルチャースクールと同様、家庭での子育てに一段落のついた主婦の方々である。当館では、社会教育施設として積極的な生涯学習への活用を検討していたこともあり、アングイン体験での傾向を参考にしながら新たに成年層の需要を見込んだ‘衣’に関連する新メニューの開発を行うこととなった。それを契機として、「古代の染色」にちなんだ体験を導入している。

そのような経過のもと、近年では当館の‘衣’に関連しての体験プログラムは大人向け、女性向けのものとして、「アングイン」と「古代の染色」を軸に整備が進められている。‘衣’に関連して、布づくりの〈染め〉と〈織り（編み）〉＝染織の2つの要素を体験できることとなる。

2 「アングイン」に関する体験学習プログラム ＜縄文時代の布づくり＞

「アングイン」に関する体験学習プログラムは、縄文時代の布づくりを目的に開館当初から体験活動室メニュー、団体来館者向けメニューとして取り入れられ、継続的に実施しているプログラムのひとつである。特に、平成15年度から実施された実技講座「カラムシから布をつくらう」を契機に、古代の畑でのカラムシ栽培とその利用について検討を加え、民俗事例を参考としながら他館とは異なる独自の展開を遂げている。

別表は「アングイン」に関する体験プログラム等の一覧である。

| 体験学習事業 | | | |
|--------|-----------|-------------|--|
| 常時体験型 | 体験活動室メニュー | (個人来館者向け) | ・ アンギン編みに挑戦しよう(材料費300円) |
| | 団体予約メニュー | (団体来館者向け) | ・ 縄文時代の布を編もう(材料費300円, 小学5年生以上) |
| 募集型 | 実技講座 | 平成13・14年度実施 | ・ アンギン編み(材料費300円, 小学生以上) |
| | | 平成15年度～ | ・ カラムシから布をつくろう(材料費200円, 小学生以上) * 平成21年度より材料費500円, 中学生以上 |
| | 森の塾 | 平成19年度実施 | ・ 糸づくり |
| | | 平成20年度実施 | ・ 糸づくり |

| 研修事業 | | |
|----------|-------------|-------------------|
| 体験学習支援研修 | 平成14～16年度実施 | ・ 「マイギリ」と「アンギン編み」 |
| | 平成17・18年度実施 | ・ 「アンギン」づくり |
| | 平成20～21年度実施 | ・ 指導者のための糸づくり |
| 入門考古学講座 | 平成20年度 | ・ 「衣」の考古学 |

表2 当館での「アンギン」に関する体験学習プログラム等

(1) 体験学習事業および関連事業での実施状況

□体験活動室メニュー

体験活動室において個人での来館者を対象としたメニューで、2週間ごとに「勾玉・管玉づくり」の他に別メニューを加えて実施している。

『アンギン編みに挑戦しよう』

開館年の平成13年度より、縄文時代の布の編み方や植物繊維の利用を学ぶことを目的として実施したものである。体験では、近年まで各地に認められた炭俵や筵づくりでの‘ムシロ編み’と同様の原理で、原料には中国産のカラムシ製の糸を使用し、約10cm四方のコースター状の布を作成して材料費負担のもと完成品を持ち帰っていただいている。なお、体験用に準備したアンギン台や経糸の両端につける錘のコモヅチについて



写真2 活動室の体験の様子

は、南会津地方のムシロ編みの道具類を参考に職員が製作している。

体験者数が伸びず、道具類の整備が不十分であったため、平成16年度以降は体験のみ実施するなど定期的なメニューから外すこともあった。しかしながら、当館において実施することの意義を考慮し、平成20年度よりメニュー化の再検討を行って関連行事と組み合わせるなどして復活した。体験者の大多数は大人の方で、お子さんの勾玉づくりの待ち時間などに体験されることが多いようである。

□団体来館者向けメニュー

事前に予約された団体来館者の方々向けに、いくつかの対応が可能な体験メニューを用意して実施している。

『縄文時代の布を編もう』（資料1 アンギンシート）

開館年より体験活動室メニューと同様、団体来館者向けとして実施するものである。恒常的な体験希望が得られないこともあり、時代背景に裏打ちされた道具や原料の提供に努めながら、道具類（アンギン台、コモヅチ等）の整備や経糸の準備など、機会あるごとに職員の手によるところが多い。そのため、平成16年度より人数制限を設け、1回の体験者数を小・中学校の学級単位を考慮して上限30名程度としている。ただし、この場合は二人1組となって交代しながら行うこととなる。

対象年齢については小学5年生以上としているが、予備知識のある大人の場合とは異なり、小学生にとっては編み方の具体的なイメージを捉えることが困難であり、理解にも個人差が大きい。そのため、小学生と大人では指導方法や体験内容を変えており、小学生には両端にコモヅチを取りつけた状態で経糸を用意し、二人1組となって協力しながらそれぞれコースター1枚を仕上げていただいている。



写真3 二人1組での体験の様子

□実技講座

月1～2回程度の埋蔵文化財を中心とした古代の技術に触れることを目的とした講座で、事前申し込みが必要となる。

『アンギン編み』（資料2 アンギン台製作資料）

平成13・14年度に実施したもので、アンギンを編む体験だけではなく、編み台も含めて製作してもらう体験である。編み台は、身近にある段ボールを利用した厚紙で横材の部分とそれを支える脚の部分とを製作し、その台を使用して体験活動室と同様に10cm四方のコースター状の物を作成した。自作の台は作品とともに持ち帰りいただき、自宅でも糸を用意すれば自作の台でアンギン編みの体験をすることができる。

『カラムシから布をつくろう』（資料3・4 実技講座配布用①②）

平成15年度より「カラムシから布をつくろう」として、連続3回の講座として実施してきたものである。当館の敷地の一角（古代の畑）においてカラムシの作付けを行い、原料の採取から繊維の取り出し、糸づくり、アンギン編みの各工程を通して縄文時代の布づくりを行う体

験である。

この講座では、実際にカラムシを刈り取り、繊維を取り出す体験ができることに大きな特徴がある。カラムシとはイラクサ科の多年草で、茎の部分より繊維を取り出し、古来より衣服の原料として利用されてきたもののひとつである。福島県昭和村では本州唯一のカラムシの生産地として、その技術や生産用具が国選定保存技術や県指定重要有形文化財に指定されている。それらを参考にしながら、衣服の原料として縄文時代まで遡ることのできる植物のひとつとして導入したものである。

各工程で使用される道具やカラムシの栽培方法等について改善すべき点多々あるが、開講より安定した人気を保っている。カラムシが、近世以降に木綿が普及する以前に多用された原料であったことや、かつて身近な植物を利用して営んできた衣生活について再認識させてくれることが要因のようである。

なお、参加者の多数が成人女性であることから、対象者を平成21年より中学生以上として実施した。アンギン編みの工程を、単純構造のものから越後アンギンの手法へと難易度をあげたところ、アンギン編みの体験にも興味を持てただけだったようだ。

□まほろん森の塾

年度当初に募集を行い、年間を通して古代の人々の知恵や技術を学び『生きる力』を育むことを目的としたものである。

『糸づくり』

古代の人々の‘衣’に関わる技術に触れるということで、平成19・20年度に「糸づくり」の中でカラムシの刈り取りと繊維の取り出し、繊維を撚り合わせて糸づくりまでの体験を行った。日常の衣服が化学繊維によって大量に生産される時代において、身近な植物から微量の繊維を取り出すという体験には新鮮な驚きがあったようである。

□体験学習支援研修

研修事業の中で、学校や公民館等で行う体験学習の指導者向けに実施した実技を中心とした研修である。



写真4 カラムシの刈り取り



写真5 カラムシの苧引き

「アンギン」関連

体験学習研修として、平成14年度から火おこし道具の「マイギリ」との2本立てで、身近な材料での道具作りと教材としての使用方法の研修を行った。「アンギン」の編み台については、平成13・14年での実技講座で取り上げたものと同様のものである。その後、平成17年度からは指導法を充実させ、「アンギン」として独立させて実施した。さらに平成19年度には‘編む’という点に絞り込み、民俗事例としての越後アンギンを掘り下げて紹介し、実際にその技法も体験していただいた。なお、この経験を生かして平成21年度の実技講座『カラムシから布をつくろう』からは、越後アンギンの手法を導入している。

『指導者のための糸づくり』

「アンギン」関連の研修受講者からの要望もあり、教職員の夏期休暇と合わせて実技講座の内容を参考にしながら、カラムシから繊維を取り出し、糸づくりを行う体験の研修を行った。また、学校時間にあわせての短時間で成果品となるよう、実用化に向けて古代の組紐づくり等の提案も行った。受講者からは概ね好評であるが、実技講座の開講時期とも重なり、指導者とは別に一般の方の参加も多く研修目的が反映されていない。

□ボランティア運営事業

当館では、開館当初よりボランティア登録を行っており、体験学習の支援として実技講座やイベント等でご協力いただいている。

特に、平成17年度からは自主組織である「まほろんボランティアの会」が結成され、自主活動グ



写真6 アンギン体験の様子

ループによる活動が行われた。そのうちの「アンギングループ」では、実技講座『カラムシから布をつくろう』での支援活動を中心に、ボランティアイベントをはじめ館内でのアンギン体験を企画、実行した。さらにアンギン体験では、アンギンを編むという体験を発展させ、『縄文時代の衣服をつくろう』として、希望者に同一のものを交替しながら編みあげてもらい縄文時代の衣装として仕上げていただいた。

(2) 今後の課題 ― 弥生時代以降の布づくりに向けて ―

当館の体験学習事業において、「アンギン」に関しての体験プログラムについては大枠の体

裁が整いつつある。今後は、縄文時代の布づくりを目的としたアングイン体験というコンセプトを再確認し、対象年齢によっては体験内容や指導方法の差別化を図りながら体験学習の質の向上に努めなければならない。

その一方で、今後の課題としては縄文時代（＝アングイン）の布づくりから弥生時代（＝原始機）の布づくりへの新たな展開である。弥生時代以降の布づくりには織機の導入と発展があり、当館の収蔵資料として土器底部に平織痕の認められるものや各時代の紡錘車が保管されることから、それらを生かした体験内容の開発の必要性を強く感じる。また、織機が普及するに従いカラムシをはじめとする組織的な麻栽培が始められるが、その点からもカラムシの活用を継続しつつ、比較資料として他の原料（アカソ、シナ、絹・綿）についても取り上げていきたいものである。

3 「古代の染色」に関する体験学習プログラム

「古代の染色」に関する体験学習プログラムは、実技講座「カラムシから布をつくろう」での参加者の傾向を参考に、同様の‘衣’に関連する体験として、大人向け、女性向けの実技講座として導入されたものである。ただし、当館が収蔵する埋蔵文化財に反映させることが難しいため、正倉院等に保管される資料を参照にしながら、本県の植生を考慮しつつ古代から馴染みのある植物染料を使用した染色体験として実施している。

別表は「古代の染色」に関する体験プログラム等の一覧である。

| 体験学習事業 | | | |
|--------|------|-------------|--------------------------------------|
| 募集型 | 実技講座 | 平成18年度実施 | ・ 古代の染色に挑戦しよう[アカネ](材料費300円, 小学生以上) |
| | | 平成19・20年度実施 | ・ 古代の染色に挑戦しよう[タデアイ](材料費1200円, 小学生以上) |
| | 森の塾 | 平成20年度実施 | ・ しのぶもちずりにちょうせん！！ |
| | イベント | 平成19年度実施 | ・ しのぶもちずりに挑戦[ベニバナ]『まほろん夏まつり』 |
| | | 平成20年度実施 | ・ 古代のすり染めに挑戦[タデアイ]『まほろん夏まつり』 |

表3 当館での「古代の染色」に関する体験学習プログラム

(1) 体験学習事業での実施状況

□実技講座（資料5 実技講座配布用）

『古代の染色に挑戦しよう（アカネ、タデアイ）』

平成18年度の実技講座から「古代の染色」体験を導入した。初年度は県内在住の染織家を外部講師として招来し、当館の敷地内でも散見されるニホンアカネの根の部分を出しての茜染めを行った。その経験を生かし、平成19・20年度は実際にタデアイを栽培し、当館職員によるタデアイの生葉染めとして実施した。

日本での植物染料の使用は、奈良時代にはほぼ完成したといわれるが、ほとんどが多量の原料を煮出して濃縮したものである。染色体験の多くは講師が染料を作成し、受講者は絞り等の模様づけを行って染めるのみの体験となってしまう。そのため、当館ではタデアイの特性を生

かし、当館の敷地内でタデアイを栽培し、タデアイの葉を採取して揉み込んでもらい、自分自身で作った染料に浸して簡単な絞りや濃淡づけによる模様染めの体験とした。

染色体験は色が染まり、模様がつけれ…と老若男女が楽しめる体験であり、夏休み期間中の講座ということもあって家族連れや母娘、友人同士での参加者が少なくない。他の講座と比べて材料費は若干かかるものの、仕上がった作品をストールとして使用できる実用性のあることも参加者には好評のようである。

タデアイは、福島県内では会津木綿等の藍染めの染料としても馴染み深いものであるが、実際に目にすることは少なくなっている。そこで実技講座のPRも兼



写真7 体験のようす



写真8 タデアイの花の様子

ねて、野外展示の「奈良時代の家」の周辺には、タデアイやベニバナといった代表的な古代からの染料となる植物を観賞用として栽培した。野外広場を散策中の来館者の方々の関心は高く、足を止めて観賞されていた様子が印象的であった。

□イベント（資料6 イベント配布用）

年に数回程度、不特定多数の方を対象とした埋蔵文化財を中心とした古代の技術に触れることを目的とした催しである。

『まほろん夏まつり』『古代のすり染めに挑戦（しのぶもちずり）』

『まほろん夏まつり』のイベントは、開館記念日（7/15）と関連付けて実施しており、夏休み直前あるいは前半の週末に複数の体験ブースを配置して開催している。「古代のすり染め」体験も、そのような体験ブースのひとつである。平成20年度にはベニバナ、平成21年度にはタデアイを染料とし、体験広場に配置する休憩用の石材を利用して、その上に布を広げ、染料を摺りこんでの模様染めを行った。



写真9 すり染め体験のようす

現在の福島市周辺地域と推定される古代信夫郡は、古代の摺り染めと考えられる「しのぶもちずり」が当地域の代表的な特産品であった。体験は、この「しのぶもちずり」を参考としたものである。県南地域ということもあり認知度が低く残念であったが、簡単に大人の方から小さなお子さんまで楽しむことができ、特に親子での体験の様子は微笑ましいものがあった。

□森の塾（資料7 『みんなの研究広場』 展示パネル）

『しのぶもちずりにちょうせん！！』

イベント『まほろん夏まつり』での摺り染め体験と同様の方法で、2つのグループにわかれて古代の摺り染め「しのぶもちずり」を再現してもらった。着物の胴裏等の使い古しの絹布を使い、その上にタデアイの葉を摺りつけ、グループごとに創意工夫しながらひとつの作品を仕上げてもらった。なお、この体験用の絹布は、当館の取り組みにご理解いただき、当時の風合に準じたものをと県内の染織家の方からご提供いただいたものである。



写真 10 展示のようす

（2）今後の課題

「古代の染色」に関する体験学習プログラムは、当館の体験学習事業における位置づけを再検討し、今後の展開への方針を示すことが必要と考える。当館の敷地内には古代から染料として使用されてきたいくつかの植物が生育しており、それらを利用した古代の染料による体験案を挙げることができる。ただし、そのような染色体験を順に行っていくのではなく、研究復元として古代の技術を再現（柿渋づくり、沈殿藍づくり等）するまでを目指すか、現存する文化財（考古資料、有形・無形の民俗資料）に関連付けるのかによっては、当館の体験事業の中でも存在感のあるものとなりそうである。他にも、布づくりに固定せずに古代の紙染めや紅づくり等の体験も可能である。邪馬台国論争でも話題となる奈良県纏向遺跡ではベニバナ栽培が指摘されており、当館でも今後の活用材料のひとつとなろう。

4 まとめ

当館の‘衣’に関わる体験学習プログラムは、布づくりに主眼をおいたものとなっている。今後は、体験活動室メニューの「時代衣装」の内容を充実させるなど、日本の服飾研究の成果も取り入れながら身にまとう衣服＝被服に目を向けた体験案の検討が必要であろう。

しかしながら、当館の‘衣’の分野での体験学習は、従来通り布づくりの体験を基調としたものを継続していくべきであると考え。化学繊維や化学染料によって大量生産され、広範囲に流通する衣服を着用できる今日とは異なり、かつては衣服が製品化されるひとつひとつの工程には多くの労力と時間が割かれている。布づくりの体験は、個々の技術の習得あるいは再現

識してもらえばかりではなく、当時の人々の生活の様子に想像を膨らませ、現在の生活を省みて先人たちの偉業を感じ取ってもらうことができる体験学習のひとつである。そして、当館にとって、そのようなプログラムの提供を継続することこそが、先人たちの残した文化財をより深く理解していただき、当館の掲げる文化財保護とその普及活動への第一歩となるものと考えている。

<参考文献>

- 福島県文化財センター白河館『年報2001－2008』（平成14-21）
福島市教育委員会『奥の細道紀行三百年記念「しのぶもちずり」』（平成元）
竹内晶子『考古学選書9 弥生の布を織る』（1989）
十日町博物館『図説越後アンギン』（平成6）
尾関清子『縄文の布』（1996）
吉岡幸雄『日本の色辞典』（2000）
からむし工芸博物館『苧』（2001）

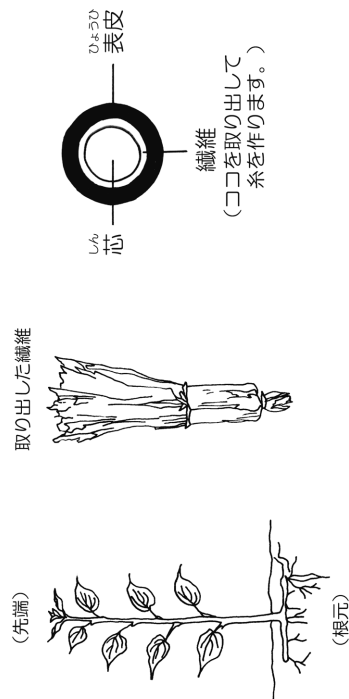
まほろん実技講座

「カラムシから布をつくろう」

カラムシなどの植物繊維には方向があります。

根の方から繊維となる細胞が上へ上へと伸びるからです。

そのため作業をするときは、根元から先端へと扱います。



【カラムシの刈り取り】

①根元より10cm～15cm上の部分に鎌をあて刈り取ります。

※カラムシは細く伸びている、日陰のものが良い。

②刈り取ったカラムシは、葉を茎の先端からしごいて落としてします。

③長さをそろえて、水に浸しておきます。

※乾燥を防ぎ、芋引きしやすくするため。

資料 3 実技講座配布①

おひ

【芋引きのしかた】



①茎の根元近くに折り目をつけ、皮に切れ目をいれます。

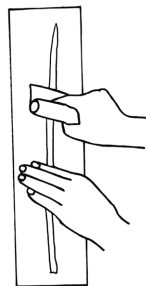


②芯と皮の間に指を入れて、皮部が2枚になるように剥いていきます。

③剥いた皮は、水に浸しておきます。
※アクを取り、表皮を剥がしやすくするため。



④剥いた皮から表皮のみを剥がします。
※剥いた皮の裏側にスクッパーを押し当ててから剥がすと表皮が剥がれやすくなります。



⑤芋引き具（スクッパー）を使い、さらに表皮（色素）を取り除きます。

※色素が残っていると乾燥後に黒くなるので、なるべくきれいに取り除くのがポイントです。

⑥残った白い繊維を陰干しします。

資料 4 実技講座配布②

古代の藍染め < 縹色 >

◇ 日本の藍染め

かつて西洋人たちにジャパンブルーと称賛された日本の藍染めは、タデアイの葉を発酵させたものです。木綿や麻などにもよく染まり、防虫効果も高いといわれる藍染めは、日本人の生活の中に広く受け入れられていきました。

藍とはもともと染料の意味で、実際に藍という植物は存在しません。藍染めとは青の色素(インジカン)をもつ植物を利用する染めものことで、世界中にそのような植物が存在します。日本では一般的にタデアイを使用しています。



タデアイの花

タデアイは、花を咲かせる直前の7月末から8月にかけて、葉の部分に青の色素を蓄えます。藍染めにはその時期に刈り取った葉を使用します。徳島県の阿波(あわ)藍に代表される藍染めの方法は、その葉を乾燥させ、発酵させた堆肥状のもの(すくも)を作ります。それを灰汁などアルカリ性の液体に入れ、一定の温度に保ちながら還元発酵の状態で染色するものです。この方法は、木綿の栽培が盛んになる室町時代以降に各地に普及にしていきました。



◇ 古代の藍染め

正倉院に残された資料から、奈良時代には藍染めの技術が完成していたことがわかります。平安時代のくらしの様子がかがえる『延喜式(えんぎしき)』の記述には、当時の藍染めの分量があり、特に藍=タデアイだけで染め上げた色を「縹(はなだ)」としています。また、絹の染色にはタデアイの生の葉を使用していたようです。今回は『延喜式』の記述を参考に、タデアイの生葉で絹の布を当時の縹色に染めてみたいと思います。

● 参考文献 吉岡幸雄「日本の色を染める」(2002)

資料 5 実技講座配布用③

開眼縹 (かいげんののろ) [正倉院宝物]



開館7周年記念『まほろん夏まつり』

「しのぶもちずい」に挑戦

みちのくのしのぶもちずい誰ゆえに

みだれそれめにし我ならなくに 河原左大臣(源 融)

百人一首のひとつとして知られるこの歌は、都から地方に派遣された按察使(地方行政の監督官)と地方の長者の娘との悲恋を詠んだものです。

‘しのぶもちずい’とは、現在の福島県北部にあたる信夫地方で生産された絹の染めもののことと考えられています。福島市山口の文知摺観音には、芭蕉が訪れたことでも知られる文知摺石が置かれ、その傍らには小さな綾形石が並んでいます。

綾形石は名前の通り、表面の模様様が格子状になっていきます。2つの石は、しのぶもちずいとの関連の深いものとして伝えられています。

今回の体験は、綾形石を使用した古代の摺り染めとして、まほろん風のしのぶもちずいに挑戦していただきます。



文知摺石

参考:福島市教育委員会『奥の細道紀行三百年記念「しのぶもちずい」をめぐって』(平成元年)

◇体験についてのご注意◇

- ・どなたでも参加いただけますが、小学4年生以下は保護者の同伴が必要です。時間までに会場にお集まりください。
- ・体験では水を使用しますので、衣服がぬれる場合があります。また、使用する染料は植物性のもので人体には無害ですが、衣服に付着すると変色する場合があります。皮膚やツメなどにも染まりやすいため、数日間、色素が残ることがあります。
- ・染色した布は色止めをしていますが、日陰で乾燥させ、1週間後に水洗いをしてください。(黄色の色素が抜けて発色がよくなります)その後は退色を防ぐため、暗所で半年間ほど保存することをお薦めします。

資料 6 イベント配布用

こもあがり



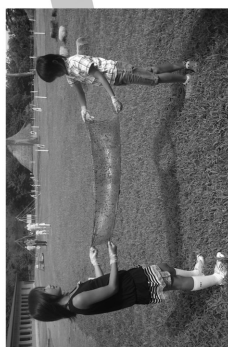
葉をつまんで、
布にすりつけます。



石の上に布を広げます。



葉の部分を集めます。
畑からタネアイをつんできて、



お日さまにあらまて。

青の色が
こくなってきましたよ！



葉のカスを洗い流します。